

## 博士論文審査及び学力の確認の結果

審査委員（主査） 上村 忠男



水林章氏の博士学位請求論文「〈文明化の過程〉と文学のエクリチュール—モリエールからバルザックへ」は、氏自身の説明によれば、フランスにおいてノルベルト・エリアスのいう「文明化の過程」が国家と市民的経済＝職業社会の二元的編成からなる「近代」の生成に向けて展開した17世紀の絶対主義の時代から18世紀の啓蒙主義の時代にかけての文学的実践の諸形態を検討することによって、その過程を生きた作家たちが、今日ではわたしたちのだれもがもはやけっして避けることのできない現実として受け入れている生存の様式にたいして、どのような批判的な距離と構えをとりえたのかを明らかにしようとしたものであるという。そして、この課題にとりくむにあたっての方法としては、あくまでもテキストの内部にとどまり、テキストを構成している言語的諸要素によって生み出される意味作用に細心の注意を払いながら、テキストが「文明化」という歴史のダイナミックの磁力にさらされることによって逆にそのダイナミックにどのようににはたらきかけているかをつぶさに観察するという方法が試みられたとのことである。まことに気宇壮大で野心的な実験作というほかない。第1部に1994年にみすず書房から出版された『幸福への意志—〈文明化〉のエクリチュール』を、第2部に1996年に山川出版社から出版された『ドン・ジュアンの埋葬—モリエール『ドン・ジュアン』における歴史と社会』を—いずれも加筆修正のうえ—配するという構成をとっている。

審査には、以上のような論文の性格を考慮して、まず学内から上村忠男（大学院地域文化研究科教授／学問論・思想史）、西谷修（大学院地域文化研究科教授／フランス文学・フランス思想）、牛島信明（外国語学部教授／スペイン文学）の3名があたったほか、今回は学内教員による申請であることから、このような場合には審査の公平性を期するため審査委員会には学外から2名の審査委員が加わることとするという大学院教授会での申し合わせにしたがって、慶應義塾大学文学部教授の鷲見洋一氏（フランス文学・フランス思想）と学習院大学文学部教授の福井憲彦氏（歴史学・フランス史）に参加願った。そして結果を要言すれば、着想も、方法上の構想も、その練り上げも、膨らみも、おびただしいテキスト群への執拗といってもよい参照やそれらのテキスト間の照合も、達成度も、称賛

に値する研究であり、博士号を授与するのに十分な条件を充たしてなお余りあるものがあるというのが、審査委員全員の一致した見解であった。

なかでも鷺見委員からは、①水林氏とフランス語との出会いの現在の水準には――水林氏自身も口頭試問の冒頭でのプレゼンテーションのなかで「告白」されたように――まさに「フランス語を生きる」という表現がぴったり当てはまるものがあり、それが今回の論文におけるテキスト分析をも根底において支え賦活しているとの指摘があったほか、②今回の論文、とくに第1部「幸福への意志」において水林氏がとっている方法論上の戦略の特徴を換喩（テキストの細部から全体的な展望を切り開いていく方法）・交叉（2種類の異なったテキストを同時に重ね合わせて読む方法）・還元（文学作品を内閉的な完成体と見なさず、それをそれもその一部であるところのマクロな歴史的状況に関連づけて把握する方法）の3点に探りあてたうえで、これら3つの方法を駆使して成果を挙げている点での（日本における18世紀フランス文学研究のなかでの）画期性についての高い評価があった。

また牛島委員からは、文学作品を歴史との関係において論じるとなると、勢いテキストから遊離し、社会、政治、経済といった諸分野の理論に引きずられた論証になりがちであるが、水林論文の場合、あくまでも言語的編制に忠実な分析を前提としているところが好ましい、との評言があった。

さらに西谷委員からは、水林氏の本論文はれっきとした学術論文でありながら、歴史的記述と社会的分析そしてテキスト解読の稠密さにおいて、その繁茂する豊かさにおいて、そして本論文がライトモチーフとしているモーツァルトの音楽のような柔軟繊細かつ力強いうねりにおいて、通常の学術論文からは得られない「読むことの幸福感＝愉悦感」が得られる、との感想が寄せられた。

疑問や批判ないし注文がなかったわけではない。とりわけモリエールの『ドン・ジュアン』についての水林氏のとらえ方にかんして、鷺見委員から、『ドン・ジュアン』はモリエールの独創ではなく、中世からの民間伝承を踏まえて創作されたスペインのティルソ・デ・マリーナを元祖とする「ドン・ファン神話」の流れに棹さしたものであるにもかかわらず、水林氏の論文においてはそうした「神話」的＝文学史的伝統への目配りがほとんどなく、『ドン・ジュアン』があたかもモリエールのオリジナル作品であるかのようにあつかわれているのは、水林氏が歴史社会学という方法を選んだことの必然的な結果であった

とはいえ、やはり寂しい、との所感が表明された。

モリエールの『ドン・ジュアン』を考察するにあたって文学史的伝統への顧慮が欠如しているのは不備ではないかという同じ疑問は、牛島委員や福井委員からも提出された。福井委員からはまた、「歴史研究者による《ないものねだり》の質問のようにみえるかもしれないが」とことわったうえで、水林氏が対象とする時代をもっぱら「文明化の過程」としてとらえ、現在の淵源を見るようなかたちで議論が構成されていることへの「ある種の居心地の悪さ」が表明された。福井委員が危惧するのは、現在を生きている研究者の現在の関心が動機となって過去の探索へと向かうというのは歴史研究者の姿勢の基本に属することであるとして、しかしながら水林氏の場合には、そうした現在の関心の過去への投射がみずからの対象とするテキストが同時代のコンテキストのなかで宿していたであろう多様な可能性をややもすれば見失い圧殺してしまいそうになっているのではないか、ということなのであった。

なお、ドン・ファン像について鷺見委員はそれをティルソのそれもふくめて「エロスというものの根源的な形象」であるとされ、そこに彫琢されているのは「女たらし＝放蕩者」の像であるとの見解を表明されたが、このような水林氏も無批判に受容しているかにみえる「日本のフランス文学研究の伝統であるとおぼしき」ティルソ解釈にたいして、牛島委員からは「日本のフランス文学研究者はほんとうにティルソを読んでいるのであろうか」との厳しい批判が提出され、ティルソのドン・ファンは「女たらし」的などころがほとんどなく、むしろ「神ないしは既成の秩序の罵倒者＝反逆者」という非官能的できわめて象徴性の高いものであることに注意が喚起された。

つぎには、鷺見委員が水林氏の方法論上の戦略として析出した換喩・交叉・還元のうち、とくに第3番目の「還元」をめぐる議論が沸騰した。

この点については、まず鷺見委員自身から、水林氏における「還元」の方法を支えているのは、氏自身はほとんど自覚していないようであるが、マルクス主義ではないのか、との質問が出されたのにつづいて、福井委員と上村委員からも、同じく水林氏的方法的処理のうちにマルクス主義的な発展段階論図式への依存を見てとったうえで、そうした図式への包摂ないし還元の姿勢が目立つことが指摘されるとともに、それが一方における鷺見委員のいう「換喩」と「交叉」の手法を駆使したテキスト分析の豊かな成果を減殺する結果となっているようにおもわれる、との所感が表明された。これにたいして水林氏のほうか

ら、自分が試みたのは「還元」というよりは「歴史が文学的テキストのなかに残している言語的刻印を浮き立たせるための共振装置の設定」であったとの説明があったが、委員一同を納得させるまでにはいたらなかった。

また、この点と関連して、上村委員からは、水林氏にあっては「テキスト」と「テキストの外 (hors-texte)」（デリダ）との関係についてのとらえ方がいまひとつ明確でないとの指摘がなされ、西谷委員からも、水林氏は「歴史」をテキスト外的な事実のようにとらえているふしがあるが、歴史もまたそれ自体ひとつのテキストであるとの明確な認識に立つ必要があるのではないか、との批判が提起された。

最後に、「もはや・・・ではない」(nicht mehr, ne plus)と「いまだ・・・ではない」(noch nicht, pas encore) との中間に瞬時現出したかにみえる「幸福の領域」（ルソーの『新エロイーズ』に描かれているクララン農園）という水林氏の本論文第1部におけるライトモチーフについて、上村委員から、その「中間性」は「ユートピア（理想郷）」というかたちで領域化れ実体化して提示するのではなく、「ヘテロトピア」＝「異他なる反場所」というように規定するほうが生産的かつ効果的ではないのか、という指摘がなされた。「中間性」カテゴリーのもつメタ的批評機能にもっと自覚的であるべきであるというのであった。そして、「反-」と規定することの生産性にかんして、ベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」における歴史の「逆撫での読み」の可能性についての論述箇所を参照するのが有益であろうとの示唆がなされた。

さらに上村委員からは、ルソーのクララン共同体における祝祭性自体、バフチンのとらえたカーニヴァル同様、その共同体の日常（＝ケ）ではなく、あくまで収穫祭の場にあつての反日常（＝ハレ）として現出していることに注意がうながされるとともに、クララン共同体にあつてもポリス-オイコスの伝統的対立図式のなかにポリツァイという新しい社会的管理の契機が侵入しつつあるということは――この点にかんする水林氏の必死の反論にもかかわらず――やはりひとつの問題的事実として承認すべきではないか、との指摘もなされた。

なお、「もはや・・・ではない」と「いまだ・・・ではない」との関係図式にかんしては、西谷委員からも同じくベンヤミンの「歴史哲学テーゼ」におけるメシアニズムと関連させた言及があり、ベンヤミンの場合には「幸福の実現された時」というよりは「あらかじめ失われてしまっている時」というアンテ・フェストゥム／ポスト・フェストゥムの悲

劇的時代感覚が支配的であることへの注意喚起がなされた。

しかしながら、以上のような疑問や批判は水林氏の論文がそれほどまでに内容ゆたかで方法の面でも刺激的であったために出てきたものであって、水林氏の論文が到達している水準の傑出した高さを裏書きするものでこそあれ、弱点をあらわにしたものでは断じてない。審査委員会としては、水林氏の本論文が今後の本研究科における学内教員による博士学位申請論文のスタンダードとなってくれることを願っている。